

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類に平和がもたらされるか——

原水爆禁止大阪府協議会事務局長

小松正明

私は、8回に及ぶ平和文明会議に参加し、地球物理学、生命誌、経済学、原発と核兵器、社会学、ジャーナリズム論、映像・映画論など、実に広範囲の領域を学ばせていただいたことを、皆様と井原所長に心からの謝辞を送るものである。

本稿では、核兵器をめぐる国際会議に参加してきた経験から、国際情勢と核兵器廃絶をめざす運動の到達点を述べ、核兵器廃絶の展望を伝えたい。

核兵器保有国9カ国を包囲する、大きな2つの国際的潮流が生まれている。

まず、その第一は、国連加盟国193カ国中190カ国が加盟する「NPT核不拡散条約」をめぐるものである。1970年に発効し、「1970年までに核兵器を持っている国はそのまま認められ、今持っていない国は核兵器を今後保有してはならない」という完全な不平等条約であった。しかし、その第6条に、「核兵器保有国は、核軍縮交渉に誠実に対応しなければならない」と謳われており、これを引用し核兵器保有国を包囲する運動が展開された。核兵器廃絶を唱える新アジェンダ連合や国家間グループで最大となった非同盟諸国（120カ国加盟）、アフリカ会議（50カ国加盟）などが中心となり、「2010年NPT合意」を創りあげた。

原水爆禁止運動に40年以上関わってきた私にとって、歴史的到達点であった。核兵器保有国5カ国を含め189カ国で合意（北朝鮮は欠席）。その合意文書は、「核兵器のない世界の平和と安全を達成する」とし、そのために「特別の枠組み」と「特別な努力」をする、だった。国際社会では、「特別な枠組み」とは包括的な核兵器禁止条約を意味し、「特別な努力」とは国際会議を何回でも開いて努力する、ということの意味している。この大きな成果の上今年開かれる「2015年NPT再検討会議」があり、政治的焦点は、「核兵器禁止条約の交渉開始」となっている。

このような国際政治の状況を象徴するような出来事が、2014年4月26日、国連ニューヨーク本部で開かれた「2015年NPT第3回準備委員会」で見られた。マーシャル諸島政府トーマス・デブネス外務大臣が記者会見を行い、「マーシャル諸島政府は、2010年NPT合意を誠実に守らない核兵器9カ国をオランダのハーグにある国際司法裁判所（ICJ）に提訴します」と宣言した。記者会見会場は、非同盟諸国を中心とした支援する各国軍縮大使で満員となり、スタンディング・オベーションで敬意が表された。アメリカの核実験場となり、61年たっても故郷の島に帰れないロングラップ島などの人々の苦しみをデブネス外務大臣が代弁したものであった。

第二の大きな国際潮流は、「核兵器の人道性に関する国際会議」の流れである。

国際赤十字社、ペーター・マウラー総裁は、「広島で救護活動をしたジュノー博士の活動を見ても、核兵器は一旦使われたら、決して救済できない」とし、全世界に核兵器の非人道性を訴えた。第1回が2013年ノルウェー政府主催・オスロで、第2回が2014年メキシコ政府主催・ナヤリットで、第3回は2014年12月にオーストリア政府主催・ウィーンで開催された。第1回は125カ国が参加し、第3回は初めてアメリカ、イギリスが参加、参加国は158カ国に上り、この会議が大きな本流となっていることを示した。

また「核兵器の人道性に関する共同声明」は2013年、16カ国で始まったが、2014年までには155カ国の賛同国に広がっており、国連加盟国の8割までが核兵器の人道的観点から核兵器保有国を包囲している。

しかし、日本政府のこの会議に対する姿勢を示す事件が起きた。ウィーンでの第1日目、12月7日の開会宣言のあと、カナダ在住のセツコ・サーロさんの広島での被爆証言。討論に入ると、佐野利男・軍縮大使が挙手をし、「みなさんの考えは悲観的。防護服を着たら、救済できる」と発言をし、各国代表から驚きと批判の声が上がった。

採択されたウィーン宣言では、「おおかたの国際世論は、核兵器の非人道性を認め、包括的な条約の交渉を願っており、その希望は2015年NPT会議に託すものである」と、大きくなった核兵器廃絶の国際世論を宣言している。

スイス・ジュネーブ国連欧州本部前に、ビル5階立てに相当する巨大な壊れた椅子のオブジェ「ブローケン・チェア」がある。1991年、地雷禁止条約の成立を記念して建てられたものだ。無くなった1本を補うように、3本足で立っている。地球上の戦争、飢餓、貧困などで苦しむ人々を、支え続ける人類の姿を象徴しているようである。また、人間が作った愚かなものは、人間の手でなくすことができると教えてくれているようである。地雷禁止条約のように、核兵器禁止条約の成立を信じて、2015年4月26日、日本から1000名以上の仲間、世界から数万人の仲間と共に、ニューヨーク国連本部前に立つ。

核廃絶と世界平和

——非対称のバランスをとっていく映画——

映画監督
鎌仲ひとみ

世界の非対称性はますます進んでいくように見受けられる。日本が巻き起こし、世界に今も放射性物質を放出し、汚染を拡大しているその社会に生きて、上のテーマをみるなら、そこに横たわっているのは大いなる「非対称性」だ。その有り様は庶民の小さな暮らしから世界全体の覇権のありようまで通底している。だから「核」廃絶を考えることはその「非対称性」の世界に生きながら、その中から「対称性」を取り戻していく営みのことかもしれない。

人類に最初の「核」をもたらしたのはマンハッタン計画による核開発だった。その本部事務所はニューヨーク、マンハッタンの建物の中にあつた。マンハッタン計画「A」と呼ばれている。その次「B」はワシントン州ハンフォードの奇妙な地形の土地に作られた世界最初の原子炉だった。ここで長崎に落とされた原子爆弾の核弾頭に使われたプルトニウムが作られ、再処理によって抽出された。

この奇妙な土地は「メサ」と呼ばれる河岸段丘の落ち込んだ広大な砂丘のような場所だ。周囲から見えにくく、コロンビア川から大量の水を得易い。この土地を見下ろす場所で撮影をしていたら、1台のトラックがやってきて、明らかにアメリカンネイティブだと解る容顔の男性が私の隣に立った。そして、半分独り言のように私に話しかけた。

「ここはかつて我々の聖地だった。しかし、今や白人たちの聖地になってしまった。彼らはここで人殺しの道具を作って、金儲けをしているんだ。我々の聖地はすっかり汚染されてしまった。」

私は彼と2人でハンフォード核施設、9基の原子炉がコロンビア川沿いに並び、3万5千発の核弾頭にプルトニウムを供給した工場をしばらく眺めていた。彼はそれから無言で立ち去った。

「聖地」とは何か、それは何を意味しているのか。アメリカンネイティブの「聖地」は自然の力が特に強い場所を指している。かつて、ドイツの映画監督ヴェルナー・ヘルツォークは「緑の阿里が夢見るところ」という映画でオーストラリアのアボリジニの聖地を巡る物語を

描いた。その部族は自分たちを緑のアリがみている夢だと信じている。だからその土地の地下に眠る緑のアリが目覚めれば、世界の終わりがやってくる。目覚めさせてはいけない、そっとその土地に踏み入らないように静かにし続けるのだ、という言い伝えを守っていた。ところが、白人たちがやってきてその土地を掘り起こし、ウランを掘り出そうとする。ウランとはまさしく緑色の鉱物。ウランがやがてこの世界を破壊するだろうと、なぜアポリジニの先祖は知っていたのだろうか。

人類は自然との均衡＝対称性を取り続けようと思ってきた。

その、智慧は古いものとして、あるいは役に立たない、非科学的なものとして否定されてきた。近代の歴史をもう一度検証してみる必要があるだろう。私たちは今、どのような「聖地」を持っているのか、と。グランドゼロばかりがこの地上に増え続けてきた近代—現代ではなかったのか。

「核」が人間に初めて使われたその時から、現在に至るまで、「核」の本当の姿、その全貌を理解している人間はどれだけいるだろうか。「核」を使う側と使われる側、つまり核被害を受ける側の均衡は大きく崩れている。その均衡を狂わせている根底に被害の否定がある。

人類最初の核兵器の被害者から、**2000**回以上の核実験の風下住民、劣化ウラン弾の被害者、原発事故の被災者、ウラン採掘現場のヒバクシャに至るまで、なんと多くの人間が被ばくをし続けていることか。

その一人一人の人間の身体に何が起きたのか、どんな苦しみを生きるはめになったのか、本当に伝わっているだろうか。今、現在、福島で起きている事をみても解るだろう。被害の過小評価、被ばくを軽視するような政策がまかり通っている。

福島の汚染を除染する数多の除染作業員もまたヒバクシャだ。そのような認識をこの社会のメディアは決して伝えようとしない。だから「核」は存在し続けるのだ。被害が見えない、ヒバクシャも声を持たないからだ。

私の映画は小さなメディアにしか過ぎない。しかし、この崩れた均衡を修正するなんらかの貢献をしたいと願っている。人々が「核」をめぐる非対称性に自分たち自身がいかにか加担しているかをありありとみてもらいたいとも思っている。「平和」と「核」の非対称性が可視化されるような映画を作り続けていくしかない。それが私のできるささやかな働きだと思っている。

平和ワークにおける平和ワーカーの役割

——非暴力介入としてのファシリテーション——

大阪女学院大学教授

奥本京子

はじめに：紛争解決理論と平和ワーク

人類に、この世界・この時代に、「平和がもたらされる」ことがあるとすれば、それは、贈り物のようにパッケージ化された塊としてやって来るようなイメージでとらえるべきものではないであろう。平和とは、静態的なものではなく、関係性の中に育まれる豊かな過程（時間と空間に構成された「場」の要素）と方向性（価値を問う作業ともいえるもの）を保持する、極めて動態的な何ものかであろう。そうであるとすれば、平和は、既成の概念に基づく自明のものとするメッセージを声高にアピールする、あるいは押し付けるだけでは、実現するはずもない。そこには、自由な対話も、すなわち建設的な批判の余地もないからである。ではどうすればいいか。社会・世界、そしてこの時代における多様な事象の表層的な理解に留まらず、さらに深いところにある「コンフリクト（葛藤・対立・紛争）」を顕在化させ、転換することである。それは、どうすれば可能だろうか。

平和紛争学において、コンフリクトとは、人間の関係性や社会を平和的手段によって転換するための恰好の契機だとされる。コンフリクトは、複数の思想・感情を持つ個人内において、また、個人・グループ・国家・地域等の多様なレベルの複数の当事者から成る集団において、発生する。当事者は、それぞれに目標を保持しているがゆえに、目標と目標のあいだで矛盾があるとき、コンフリクトが発生するのである。武力化したコンフリクト（武力紛争）は暴力であり、コンフリクトの平和的転換に失敗したとみなされ、反対に、平和とは、コンフリクト転換の成功した結果とそこに至る過程を指す。

複数の紛争解決（転換）理論に共通する重要なこととは、われわれ一人ひとりが、多様な事象のコンフリクトとしての本質あるいは深部が隠されてしまう危険性を回避するため、徹底的にコンフリクトに対峙することである。紛争解決（転換）理論では、コンフリクトを、既に表面化している直接的な対立の部分（可視化できる矛盾の部分）を認識することと同時に、より大きなコンテクストの部分（未だ可視化できない潜在的な要因）を探知する努力を重視し、これこそが平和創造のための重要な作業であるとする。本稿は、この一連の作業を「平和ワーク」、その行為主体を「平和ワーカー」とし、その非暴力手段による「介入」の作業が、実のところファシリテーターのそれに類似することを述べ、そこに平和創造の大きな

可能性があることを検討するものである。

平和ワーカーの役割

平和ワークは、紛争転換あるいは調整（メディエーション）などと称されることも多い。また、そのワークの行為者を「平和ワーカー」や「紛争ワーカー」と呼んだりする。コンフリクトの当事者のために状況に介入し、平和ワークを行う平和ワーカーは、政治的な立場をとらず（「中立」とはまた違う意味を持つ）、当事者どうしが相互に受容可能な結論を導き出すために、交渉や対話を通して手助けする。また、感情を含んだ状況を整理するファシリテーターとして、非暴力的なコミュニケーションを助ける。

具体的な平和ワーカーの役割とはどういったものであるか。紛争解決・転換理論の代表的な一つであるトランセンド理論においては、「紛争転換：トランセンドにおける行動規範（Conflict Transformation: A TRANSCEND Code of Conduct）」として、平和紛争学研究・実践者であるヨハン・ガルトゥングが、次の項目を列挙している（翻訳は筆者による）。

<平和ワーカー自身との関係について>

1. 動機としては、当事者がコンフリクトを転換するのを手伝うということであるべきで、物理的にも、非物理的にも、自身の昇進・売り込みのためであってはならない。
2. コンフリクトに関与するにあたり、そのワークのために身につけた技術や知識を活用し開発するべきであり、技術や知識を身につけるためにワークをするのではない。
3. 自身と他者のために、紛争転換以外の隠されたアジェンダを持ってはならない。隠すものは何もない。
4. ワーカーの正当性とは、技術、知識、創造性、共感共苦の力、忍耐力、そして、コンフリクト当事者にとって同様の能力を刺激することであり、特別な指令（権限、負託）や組織に負うものではない。

<平和ワーカーと当事者との関係について>

5. ワーカー自身が、当事者のうちの誰かと未解決のコンフリクトをもっていたり、恨みをもっていたりする場合は、そのコンフリクトに関与してはならない。
6. すべての当事者との共感と対話を重要視し、「好き嫌い」を克服する。
7. 操作しようとしてはならない。手の内を明かし、何をしようとしているのか開示する。
8. 当事者からの機密性の要求を尊重し、その場合は、情報がどこに帰属しているのか明らかにしない。
9. 通常のもてなし以上に、当事者から、謝礼金、進物などを受け取らない。
10. 当事者の許可を得て初めて、当事者間のコミュニケーションを進める。

11. ある当事者にはある見解で、別の当事者には別の見解で話をするのではなく、焦点が異なることはあったとしても、「一枚舌」を使うことが重要である。
12. 何らかの計画に囚われないで、新しいアイデアに開かれているよう意識する。
13. やり直しの効かない結果や過程を提案することはしない。ワーカーが間違っているかもしれないからである。

<平和ワーカーと社会の関係について>

14. 個人、あるいは組織に対する評価・謝辞を求めない。
15. 必要とされなくなった場合は、コンフリクトから撤退する。
16. コンフリクトの結果や過程のための計画は、ワーカーにも当事者にも帰属するのではなく、公の社会に所属するのである。
17. 自身の技術、知識と経験を、他者と分かち合い、一般的な紛争転換の文化のために貢献するよう努力する。
18. 過去・現在・未来におけるコンフリクト当事者、すなわち、平和ワークの恩恵を受けた・受けている・受ける可能性のある人々から、直接に資金提供を受けない。
19. 平和ワークとは仕事であり、その見返りは、その仕事を十分に実行することである。

上記の 19 項目は、いずれも、平和ワークの現場において、現実に行われがちであることに對するアンチテーゼとして述べられている。その意味で、これらは実行が極めて困難な行動規範であるとも言える。しかし、平和ワーカーが常に参照し、到達すべき理想として、これらの行動規範は重要な意味を持つであろう。これらの項目は、第一に、介入者である平和ワーカーのための指針となる。そして、第二に、徐々に平和ワーカーへと「成長」していくコンフリクト当事者にも理解・実践されねばならないと考える。

非暴力介入としてのファシリテーション

次に、平和ワークの主体である平和ワーカーの役割とは、ワークショップ等における「ファシリテーター」の果たす機能と近い関係にあることを叙述する。ファシリテーターとは、「ファシリテーション」の行為者である。「ワークショップ」とは、ワークショップ・ファシリテーション研究・実践者の中野民夫によれば、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学び合ったり作り出したりする、双方向的な学びと創造のスタイルであり、ワークショップにおける「ファシリテーション」とは、「場を作る」、「つなぐ」、「引き出す」、「促進する」という仕事である。さらに、「ワークショップ・ファシリテーター」とは、人と人が集う場で、お互いのコミュニケーションを円滑に促進し、それぞれの経験や知恵や意欲を上手に引き出しながら、学びや創造活動、時には紛争解決を容易にしていく役割であるという。

中野は、聖マーガレット生涯教育研究所の西田真哉の説を借用し、ファシリテーターであるための条件として次の10項目を挙げている。

1. 主体的にその場に存在している。
2. 柔軟性と決断する勇気がある。
3. 他者の枠組みで把握する努力ができる。
4. 表現力の豊かさ、参加者への反応の明確さがある。
5. 評価的な言動はつつしむべきとわきまえている。
6. プロセスへの介入を理解し、必要に際して実行できる。
7. 相互理解のための自己開示を率先できる、開放性がある。
8. 親密性、楽天性がある。
9. 自己の間違いや知らないことを認めることに率直である。
10. 参加者を信頼し、尊重する。

ワークショップの場において、ファシリテーターは、特定の参加者の肩をもつということにはせず、参加者が相互に聴き合うことを励行し、より多くの声を聴くことで各参加者の参加度をバランスよく調整する。そして、参加者全員が十分に聴いてもらえたと感じられる環境を整える。様々な意見が飛び交う中で、あるトピックについて安定して集中できるように会話を交通整理し、強い感情が沸き起こったときには、それを穏やかに聴き、グループで受け入れる状況を作る。徐々に時間をかけて、グループ全体と一緒にワークする力があるのだという自信が醸成されるように、見守る。これらの作業をファシリテーターがなすことにより、グループの実践と成功に大きな違いをもたらすことができるのである。

コンフリクトの現場における平和ワーカーは、コンフリクト当事者のために傾聴することがその第一の役割である。まさに、上段落のワークショップ・ファシリテーターの役割そのものの機能を果たすのである。平和ワーカーが「場」を用意し、場合によっては、コンフリクトの当事者の中から適切なファシリテーター役を担う人材を選ぶこともある。あたかも、ワークショップの中で参加者が自らの問題意識を語る時のように、コンフリクトの当事者が抱えるコンフリクトについて語り合うための場作りを行うのである。

このようにして、平和ワーカーとは、平和ワークを遂行するにあたり主体となる存在である。平和ワークの中でも、特に「非暴力介入」の側面をもつ作業は、ファシリテーター的要素を合わせ持った存在によって実践される。西田によるファシリテーターとしての条件を満たし、ガルトゥングによる行動規範を覚えつつ、非暴力手段により状況に介入し、当事者各

人のゴールとニーズを聴きだし、そのエッセンスを抽出する手伝いをする。そのようにして、コンフリクトの根源的な、そして潜在的な重要部分の転換を行うのである。そして、介入者のみならず、平和ワーカーが深まりゆくにつれて、コンフリクトの当事者自身が、徐々に平和ワーカーと成っていくのである。もとより、当該コンフリクトのオーナーシップは、当事者にあるのだ。

おわりに：ワークショップ形式の学びのスタイルから得るもの

ファシリテーションの技術と態度を身に着け、実際の現実世界の非暴力介入においてそれを応用するためには、何が必要か。ここで重要なことは、ファシリテーター的要素とは、ワークショップという形態の学習方法において、理論や技術を効率よく消化するような類のものではない。それは、体験学習（ワークショップ）を通じ、参加者同士やファシリテーターとの関係性から、参加者が自発的に学んでいく態度のことを指すのである。ファシリテーター的素養を保持する平和ワーカーに成るためには、そのための研究・実践・トレーニングが必須である。

しかしながら、社会・世界の諸問題を批判的に研究する学界の動向において、主に、各「 이슈ー」（例：経済発展や環境保護の平和・暴力との関係、難民・移住労働者を扱う社会の問題、軍事システムと抑圧・搾取の関係、そして原子力エネルギーや核兵器を含めた核問題など）それ自体についての展開は見て取れるものの、 이슈ーを「如何に扱うか」の問題が置き去りにされてきたのではないだろうか。 이슈ー一つひとつにおけるコンフリクトをどのように把握し、それが悪化（武力化・暴力化）することを予防し、未然に非暴力的に転換し、オルタナティブを提唱するかといった方法論の研究が、いまだ十分でない。

平和団体・個人の研究者・活動家、また市民の一人ひとりが連帯し、上記の 이슈ーを解決・転換するためにも、方法論としての平和ワーカーが、今の時代には必須であることを痛感する。非暴力手段による直接介入や紛争転換（調停）のほかに、トラウマ・ヒーリング、修復的正義、平和教育、平和運動、法的制度などの無数のアプローチによる作業の充実が目指される必要があるだろう。また、筆者が特に関心を寄せ研究・実践の中心としている、「芸術アプローチ」もさらなる展開が必要である。これらのアプローチは、近年、世界各地の平和構築トレーニングの場において、ワークショップ形式で学習・実践され、学習者がさまざまなコンフリクトの現場に持ち帰り、そこで応用されている。

一般的に、平和ワーカーとは、非暴力介入を行う調停者を指す。その仕事は、混迷を深めるコンフリクトの現場には、現実的には不可欠ではある。しかし、上述したように、平和ワーカーを、誰をおいても担うべきは、コンフリクトの当事者である。コンフリクトの当事者に

とってファシリテーションの手法から学べることは、もっぱら自身にとっての喫緊の課題として、如何にコンフリクトを転換するかの方法論であろう。そのために、介入者から平和ワークのトレーニングを受けたり、知識を身につけたり、当事者どうしの対話を発展させたりするうちに、平和ワークの意味を知る。状況・環境・条件が整い始めた頃、当事者自らが、ファシリテーター的要素を持った平和ワーカーへと成長・変身するのである。平和ワークの主体とは、このようにして形成される。

非暴力介入という平和ワークは、現実的に不可欠であると既に書いた。仮に、コンフリクトの当事者が、自身でコンフリクトを解決できない場合(状況・条件・環境が整わない場合)、外部より何らかの介入をすることが必要になる。そのとき、外部から平和ワーカーとして非暴力介入が起こる。当事者が状況を乗り越え、平和ワーカーと成っていくことを、介入者は、限りなく信頼し、尊重するという姿勢が明瞭でなければならない。必ずしも介入者のほうが「立場が上である」とか「専門家としてより優れている」ということではなく、当事者は自らの紛争についての歴史的・文化的詳細に亘る状況についての専門家であり尊重されるべきである。衡平な人間関係において、当事者と介入者が、平和ワークに共同作業で取り組んで初めて、平和創造が実現する過程が形成されるのである。

そしてまた、実は、これらの介入者は、その後も永久に「外部者」に留まるのではない。介入者自身も、調停などの平和ワークを通して、徐々にコンフリクトの当事者と成っていくのである(そのとき介入者は「外部の当事者」となる)。そして、コンフリクトとの関わりを深め、自身の生き様としての平和ワークに身を投じるとき、介入者である平和ワーカーは、本当の意味でのファシリテーター的要素を持った平和ワーカーと成るのであろう。こうして、肯定的な意味における相互依存的・補完的な平和ワークが成立する。平和ワークとは、当事者と介入者が共に実践する「共同プロジェクト」である。そうすれば結果として、人類に、この世界・この時代に、「平和がもたらされる」であろう。

参考文献

Galtung, Johan, Carl G. Jacobsen, and Kai Frithjof Brand-Jacobsen. *Searching for Peace: the Road to TRANSCEND*. London: Pluto Press, 2000.

中野民夫『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波新書 710、岩波書店、2001

…『ファシリテーション革命：参加型の場づくりの技法』岩波アクティブ新書 69、岩波書店、2003

奥本京子「大いなるお節介：非暴力介入」『非武装の PKO：NGO 非暴力平和隊の理念と活動』君島東彦編著、明石書店、2008 (113-121)

…「非暴力平和隊・日本との交流会：＜非暴力介入＞を掲げる NGO の集い」『トランセンド研究：平和的手段による紛争の転換』7 巻 1 号、2009 (28-32)

…『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性：ガルトゥングによる朗読劇 Ho'o Pono Pono: Pax Pacifica からの考察』法律文化社、2012

…「紛争転換と芸術：動態的平和を模索して」日本平和学会編『平和研究』39 号、特集「平和を再定義する」2012 (69-89)

…「表現と伝達の平和ワーク：方法としての芸術アプローチ」世界思想社編『世界思想』2014 春 41 号、特集「表現するということ」2014 (29-34)

東北アジア地域平和構築インスティテュート (Northeast Asia Regional Peacebuilding Institute) ウェブサイト <http://www.narpi.net> (http://www.narpi.net/01_About_Narpi/Partners.html)

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類に平和がもたらされるか——

社会学者
大澤真幸

私（たち）は戦争をせず、政治的手段として暴力を用いない、という方針を貫いたところで、これだけでは絶対に世界平和にはつながらない。この方針は、次の二つのことを含意する。第一に、他人（他国）同士が戦争しているときには、そこでどんなに悲惨なこと、どんなにひどい人権侵害が起きていても、この戦争には参加せず、決着がつくまで傍観すること。第二に、自分たちが他者（他国）によって侵略されたり、不当に支配されたりしたときには、これをただひたすら忍従すること。こうしたタイプの「平和主義」は、戦争や暴力支配を（消極的に）容認するものであって、絶対に世界平和の構築には貢献しない。それならば、どうすればよいのか。

最初に、平和と正義との間の関係をどのように理解すべきなのか、この点をはっきりさせておく必要がある。今述べた、忍従的・傍観的な平和主義は、平和は正義よりも大事だ、という判断に基づいている。特定の正義へのコミットメントは、しばしば、同じ正義を支持しない者への戦争や暴力を正当化するので、「正義より平和」を唱える者は多い。しかし、よく考えてみると、これは、とんでもない主張である。どんな正義よりも平和が優先するとすれば、とてつもなく不当なこと、たとえば大量虐殺や大規模粛清がなされていても、それらを傍観し、また忍従しなくてはならない、ということになるからだ。

とすれば、正義の方が平和よりも大事だと考えるべきなのか。正義が否定されたときには、戦争や暴力もやむを得ない、と考えるべきなのか。そうではない。

平和や非暴力を、正義の（必要）条件、正義が正義でありうるための重要な条件だと理解すべきである。平和や非暴力だけで正義が定義されるわけではない。正義は、ほかにもいくつかの条件を満たしていなくてはならないだろう。しかし、少なくとも、平和・非暴力をその構成要素に含んでいなくては、正義ではない。しかも、平和・非暴力は、正義の諸条件の中で最も重要な条件である。このように平和と正義の関係を捉えると、法哲学者の井上達夫も主張しているように、平和へのコミットメントは同時に、正義への、普遍的な正義へのコミットメントだということになる。平和についてのこうした理解のもとでは、傍観的・忍従的な平和主義とは異なるタイプの平和主義、行動的なタイプの平和主義が導かれることになる。世界平和の実現につながりうるのは、こちらのタイプの平和主義である。どのような意味で行動的なのか。

まず、われわれ自身が、他者（他国）によって武力侵略を受けたり、暴力的に支配されたとき。しばしば、戦争や軍隊を放棄する平和主義者に対して、他国によって侵略されたり、

占領されたりしたときには、奴隸的な屈従を受け入れるのか、という批判がなされる。だが、平和へのコミットメントが正義へのコミットメントの一部だと見なす者は、正義にもとる侵略や支配を、唯々諾々と受け入れるわけにはいかない。とはいえ、侵略者や支配者に対して、軍事的な手段で暴力的に対抗したとすれば、われわれもまた「敵」と同じ不正義を犯したことになる。とすれば、われわれがなすべきことは、論理的に考えて、ひとつしかない。マハトマ・ガンディーが唱えたような、非暴力的抵抗である。サボタージュ、ゼネスト、そして抵抗の意志を示すデモ等が、それだ。敵は銃弾によってこれらを押さえ込もうとするかもしれないが、怯んではならない。

非暴力的抵抗は、暴力的抵抗よりも効果が小さく、(味方の)犠牲者が多くなる、と恐れる向きもあるかもしれないが、私の推測では、こうした恐れはあたらぬ。大規模な非暴力的抵抗は、暴力的抵抗よりも効果的である。また、暴力的に対抗した方が、味方の犠牲者が少なくて済む、というのはおそらく誤った推定だ。敵の観点から考えてみればよい。武器をもつ者と、武器をもたない者とどちらを殺す方が容易かを。

次に、他者(他国)同士が戦争している場合。これに関しては、私は、かねてより積極的中立主義を唱えてきた。それは、次のようなアイデアである。

AとBが、それぞれの「正義」、それぞれの「大義」を掲げて戦争している。われわれの正義の感覚に照らしたとき、どちらかの大義に、たとえばAの大義に、相対的に共感したり、賛同したりする面が大きいとする。このときには、Aに左袒し、ともにBを攻撃する……というわけにはいかない。Aと同盟してBへの戦争に参加した場合には、「平和」を枢要な条件として含んでいる、われわれが支持する正義を、われわれ自身で自ら蹂躪することになる。そもそも、たとえ相対的にはAの方がましだと思えたとしても、すでに「戦争している」ということだけで、AもBもどちらも、われわれの観点からは根本的に不正義を犯していることになる。それならば、諦めて傍観しているしかないのか。

これも違う。ここで、平和や非暴力が、どうして正義の要件になるのかを、もう一度、考えてみるとよい。戦争が不当な犠牲者を生むからであろう。AとBとが戦争しているときには、当然、どちらの陣営にも、不当な犠牲者が出ているはずだ。このことから、われわれがなすべきことは自ずと導かれる。AとBの両陣営の犠牲者を救出することを目的とした、両者への非軍事的な援助である。つまり、AとBに対して、非軍事的に贈与すること、これがわれわれのなすべきことである。普通、中立主義は、対立しあうAとBのどちらからも距離をとり、どちらにも関わらないことを意味している。しかし、積極的な中立主義は、これとは逆の態度を意味している。紛争状態にある両陣営を、ともに(非軍事的に)応援することを、である。

以上に概略を示した行動的な平和主義、正義に裏打ちされているがゆえに必然的に行動的にならざるをえない平和主義、これだけが、やがて、世界規模の平和を構築することになるだろう。

核廃絶と世界平和

——第1次平和文明会議を終えて——

京都造形芸術大学学長

尾池和夫

この会議の旗印は、藝術立国という徳山詳直さんの基本理念であり、どうすれば核廃絶と世界平和が実現できるかという課題のもとに議論が行われるという目標を持って、私は会議に臨んだが、しかし、その目標は重たすぎて、とてもついてはいけなさと感じながらの出席であった。

芸術に戦争をやめさせる力はあるのかと問いかける人もいる。芸術にそんな力があるのかと昔は私も思っていたが、それは2人のパブロの芸術と出会うことによって、芸術には人に平和を守らなければならないと思わせる力があると信じるようになった。2人のパブロとは、パブロ・カザルスとパブロ・ピカソである。

芸術の力で世界平和を実現するという理想を掲げるのはいいとしても、それがすぐに実現するとはとても思えない。しかし、決して諦めることなく、人間の良心の存在をよりどころにしてそれを求めたいというのが、生前、徳山詳直さんが繰り返し話していたことである。その通りに、諦めることなく考え続けなければならないと、私も思っている。

パブロ・ピカソの「ゲルニカ」を見るために、マドリッドの美術館を訪ねたとき、その部屋に入ったとたんに、私は言いようのない感動を覚えて立ちすくんだ。その絵には、人を感動させる力があり、平和が大切だと思わせる力があつた。また、パブロ・カザルスが国連本部で「鳥の歌」を演奏するのを、私は偶然の機会に聞くことができた。弱々しい感じから始まって、それがたちまち激しく訴えてきて、平和が大切だということを心から感じさせる曲となった。今でもありありとその響きを思い出すことができるほどに鮮烈な印象が残った。そのときの演奏に先立って、カザルスの簡単なスピーチがあり、それを忘れることができない。彼は静かに、「故郷カタルーニャの鳥は、ピース、ピース、ピースと鳴く」と話した。

繰り返すが、芸術活動に平和をもたらせる直接の能力はないかもしれないが、「ゲルニカ」に、あるいは「鳥の歌」に触れた人びとのところに、平和へと向かう強い意志を持たせる力があるのだと思う。

今、私の執務室には、京都大学霊長類研究所のチンパンジー、アイが描いた1枚の絵が掛けてある。それを見ながら、人とは何か、芸術とは何かと自分に問いかける。チンパンジーは人類に最も近い霊長類であると言われるが、その性格がたいへん闘争的である。チンパンジーに近い人類も闘争的であるということに納得させることであるようにも思うが、最近の研究で、チンパンジーは、過去の思い出、未来への悩みというようなことを示す行動や現象

を見せないということがわかってきて、もしかしたら、そのことに人類が戦争をやめるためのヒントがあるかもしれないと思うようになった。

アイは絵を描くのが好きで、餌がなくても絵を描く。チンパンジーの顔の輪郭を描いた絵を、チンパンジーに与えると、たどって同じように輪郭を描くだけであるが、人の子どもは、輪郭の中に目鼻口耳を描き加えるという。人だけが、記憶から思い浮かべて描くという力を持つ。かわりに、アイの短期記憶力は、**0.5**秒見せた数字の順番を、コンピュータ画面でたどることができる。人には絶対にできない能力を短時間の記憶力として発揮する。

このようなヒントから、芸術の力を信じて、その力を発揮させる日に近づくよう、一歩ずつ研究を進めていくことの有効性が感じられるようになった。藝術立国の考えをもとに、芸術が世界平和に貢献するためにはどうすればいいかということを考えるためには、まず、芸術と戦争との関わりの歴史をしっかりと分析し、その成果から芸術と平和を論じるのが、文明哲学研究所で行うべき研究課題であるかもしれないと思うようになった。これが、あえて言えば、2年間の8回の会議から得たことの、私の今の時点での総括であると言えるかもしれない。

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類に平和がもたらされるのか——

京都造形芸術大学・東北芸術工科大学副学長
宮島達男

原爆が落とされて 70 年。原爆症やその被害で未だに苦しむ人がいる一方、未だ核兵器は全世界に 1 万 6 千 4 百発¹も残っていると言われ、福島での事故も生々しい傷跡を残したままである。そして、武力紛争は終わる気配を見せず、繰り返されるテロの恐怖に人々は不安のどん底に陥れられている。本稿では、私の専門である「芸術」と平和の関係を論じ、ユネスコ憲章²で言われる「人の心の中に平和の砦を築く」方途を、芸術教育を通して探ってみたい。

1948 年起草の「世界人権宣言」³の 3 条には、最も基本的な人間の権利として「生存権」が挙げられている。しかし、核兵器はそれを戦後 70 年間、日常的に脅かし続けてきた。それは、一つの兵器の域を超え「絶対悪」（サタン）とも呼べる存在となっている。核保有国はそのサタンと契約をし、生き続けている。その間、核兵器反対や核廃絶など多くの人々によって政治的言動や運動が展開されてきた。しかしながら、その目的はなかなか現実化しないかのように見える。これは、核兵器というサタンがもはや、国家の政治システムに完全に組み込まれてしまって、必要悪のインフラのように振る舞っているからであり、私達は意識すらなくなっているからではないだろうか。だからこそ、私達は新しい表現で問題を視覚化し、政治ではなく、人の心の中にこそ「核はいらない」との明確なビジョンを打ち立てる必要があるのではないだろうか。

ところで、芸術は、二つのソウゾウリョクを育み育てる。一つは、想像力 (imagination)。もう一つは、創造力 (creativity) である。

想像力とは、自分以外の他者の痛みすらも想像し、感じられる力と言われる。この力によって、私達は戦争で殺された母親にすがって泣く子供の写真を見て、その子の深い悲しみが痛いほど分かるのだ。そして、例えば、この想像力が十分に鍛えられていれば、戦争が起きた時、徴兵される若い兵士の母の苦しみが想像できるだろうし、テロに巻き込まれ死んでい

¹ 2014 年の世界の核状況、米国、2014 年 4 月 29 日、核兵器数発表。FAS のサイト (Status of World Nuclear Forces <http://fas.org/issues/nuclear-weapons/status-world-nuclear-forces/>)

² ユネスコ憲章、前文。「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」

http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=15244&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html

³ 世界人権宣言、第 3 条「すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する。」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/udhr/1b_001.html

く少女の無念を想像できるのではないだろうか。一面で言えば、人々にこうした想像力が足りないから戦争やテロによる殺戮の連鎖が断ち切れない、と思うのである。

一方、創造力とは、まだカタチのないものを生み出す力のこと。新しいビジョンやアイデア、難しい問題にソリューションを与えていく力のことだ。これは、あらゆる問題解決のための基本的な力であろう。例えば、どんな戦争や武力紛争でも、まず問題が起こり紛争になる。この段階で、互いに納得のいくソリューションが提供できれば、武力闘争にまで発展しないだろう。歴史的にも有名なキューバ危機⁴。あの時、最悪のシナリオ、核戦争を回避したケネディ大統領とフルシチョフ首相の2人は、様々なアイデアを繰り出し対話して、問題を解決した。素晴らしい創造力と言えるだろう。

さらに、芸術にはもう一つ大切な力「差異への共感」が備わっている。芸術の世界では、違っていること自体が価値を有しそれを認め合う風土がある。だから、こうした感性は、紛争の原因として頻繁に現れる「差異」へのこだわりを超える力を秘めていると思う。

したがって、私は、あらゆる人々が芸術を学び、これら想像力／創造力を手に入れ、差異を認め合う心を育てていただきたいと熱望するものである。人々の中にそうした「心の砦」が築かれれば、核兵器というサタンと契約を結ばなくても、私達は生きていけるものと確信する次第である。

⁴キューバ危機。キューバを舞台に、1962年10月14日から28日までの14日間に亘って米ソ間の冷戦の緊張が、核戦争寸前まで達した危機的な状況のことである。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%90%E5%8D%B1%E6%A9%9F>

執筆者の同意が得られないため、掲載は控えさせていただきます。

執筆者の同意が得られないため、掲載は控えさせていただきます。

核廃絶と世界平和

——日常のなかへ——

東北芸術工科大学芸術学部教授

東北文化研究センター所長

田口洋美

私はフィールドを歩くことを仕事にしてきた。それは日常への冒険ともいえる。この現実の日常という何気ない日々こそがいかにかに尊く、そして守ってゆくべきものが何であるのかを教えてくれる恰好の現場とっていい。日本であろうと海外であろうと、人々は当たり前に明け、当たり前で暮れてゆく日々を生きている。その日常の風景の中を歩くことから過去の日々へと遡及する。そこには発見がある。その発見は思いがけないものだ。人は見ようとするものを見ている。感じようとするものを感じている。文芸評論家の小林秀雄が記した「人は欲するところに欲する象徴を見る」という一文を思い出す。驚きや発見は、見ようとしてこなかった、欲して来なかった自分に気づいた瞬間におとずれる。それまで見えなかったものが見える瞬間である。自分という当たり前を当たり前として自覚できたとき、つまり自分という当たり前に囚われ自分の外に出ることのなかった自分を知った時、驚きを自覚する。

この3月、私は中国の内蒙古自治区にいた。中国で日々を過ごしていると私の中に複雑で重い何かがまるで分泌物のようにじわじわと湧き出てくるのをたびたび感じた。それは子供の頃から高校生時代にかけて近所の老人から聞かされた戦時中の満州と称する地域の話に起因していた。その人は関東軍の兵士として6年間この地域に出征していた人だった。本部は斉齊哈爾（チチハル）にあった、彼はそう語っていた。日本という国の中で、当たり前の平穏な日常を生きていた私にはその老人の語る大陸での経験談はリアリティーこそ感じられないものの、私の中に今も記憶されているだけの何かがあった。その断片的な語りの記憶を抱きながら、実際に中国東北部を訪れ、歩き、人々と出会い、彼らと言葉を交わしていると、すでに世を去って久しいその老人の記憶が重々しい空気となって私を包みはじめるのだ。私は息苦しかった。正直言って逃れたい気持ちにさえなった。歴史のリアルな力に押し倒されそうになった。私は正に「戦争を知らない子供たち」の1人であるという自覚と目の前にある中国の人々の日常との間に「戦争」という過去に築かれた壁のようなものを感じ取っていた。それは中国の人々の中に感じるというのではなく、私の中にそれがあことに驚いたのである。

私は3年前の初秋にも中国を訪れていた。東日本大震災から1年半が経過した2012年9月11日、私有地であった尖閣諸島の三島（魚釣島、北小島、南小島）を、日本政府が20億

5 千万円で購入し国有化する直前だった。帰国後、日中間の関係は悪化した。折しも世の中はきな臭さを増していった。世界のあちこちでテロが起こるグローバルジハードの日々と化していった。さまざまな国のネットユーザーが自由に個人的な意見を書き込むなかで起きている「ネット戦争（舌戦）」もまた激しさを増していった。最早一個人が対応するには無理のある、許容範囲を超えた情報が私たちの日常を包みはじめた。

しかし、その後も毎年のように中国を訪れ、日常の中を歩き続けてきた。周囲の人たちは、そのような政治的二国間の立場とは関係なく、当たり前のように日常を生きていた。日々を生き、笑い、叫び、ささやき、日々の事ごとに向き合い、働き、そして遊び、日常の緊張と緩和を愉しむかのようにさえあった。しかし、私はただ研究と調査のためと決めつけ、過去のことに対して無言でいることはできなかった。中国の人たちの前で私はその老人の話、実の祖父の話の踏まえつつ、自分の考える過去について話した。それはごく私的な謝罪ともいえた。

世の中には人間社会全体の均等な発展を理想とする論理と、またそれとは逆に格差がある事によって生じる富の移動を前提とする論理がせめぎ合っている。そして歴史という怪物が両者を捕らえ、今もその呪縛のような力で人々を押さえつけている。私もまたその 1 人として日常を生活している。

共に中国を歩いている仲間が「人間は不思議な生き物ですね」と何度もつぶやいていた。なるほど彼はモンゴルに生まれ中国東北部で育ち、北京大学で法律を学び、6 つの言語を操れる才能を生かしてドイツで教師をし、人類学と出会い、流れ流れて日本にやってきて 20 年が過ぎた。2 人とも何の力にもならない事は知っているが、中国と日本が平和に、この日常をお互いが守ってゆけるにはどうすべきなのかを語り合った。二国間だけではない。この小さな惑星に生きるヒトという生き物が、皆で生き延びて行くには何が必要なのか、話し合った。

2 人が出した結論は「知恵」を絞り出すこと。それに尽きた。国家間の力学的均衡を保つには「武力による抑止力を保持すること」このありきたりな論理をどのように乗り越えて行くのか。その「知恵」とは何か。私たちのような文理融合の環境学分野に依拠する者にとって知恵といえば話し合うこと、互いの歴史や文化を理解し、了解し合う世界を目指すことになろうが、それ以上に言語を磨くことであろう。しかも翻訳可能な言語の再構築と個人の言語力をより高めることの努力が求められているのではないか。そのためにはまず自国の言語をきちんと鍛え上げるしかない。完全な言語の翻訳は不可能だといわれている。確かにそうであるが、その不可能に向き合わなくてはならないのではないか。私たちは言語によって考え、感情すら操作する生き物である。現在、日本は理科系を高く評価し文科系の評価は低いという。国立系大学の平成 28 年度改革は理高文低で流れが決まっているともいう。しかし言語を鍛える分野の軽視は、思考の軽視であり、知恵を出すにも知恵のシーズである言語を過小評価しては未来が閉じて行くばかりであろう。日常の何気ない風景を歩くことで、深

く自覚的に考えるのは言語という人類集団が鍛え上げてきたツールを単なる武器にしてしまうことへの恐怖である。言葉は武器ではない。意思を交わす基本ツールである。他者を理解し励ます力にもなり、人を傷つける刃ともなる。このきな臭い時代にあって私たちにできる努力もまた言語を鍛えること。そして自分の考えを他者に押しつけるのではなく、他者を理解できる自分を作り出すことが重要であろう。言語を鍛え上げること、それは難しいことではある。しかしその難解な壁にこそ私たちの本当の敵が存在するように思えてならない。

核廃絶と世界平和

——未来を創る芸術——

京都造形芸術大学美術工芸学科教授
ウルトラファクトリー・ディレクター
ヤノベケンジ

芸術が平和にいかに関与するか？そして、人類に平和をもたらすことができるか？という壮大なテーマについて一人の芸術家として解答を出すのは難しい。

芸術家は、理念を掲げる哲学者でもあるが、手や体を使って作品を創り出し、現場に分けあって、人々に訴えかけるのも大きな役割であると思う。その実感をもってしか説得力を持たないだろう。

だから、わたしは常に問題と向き合い、作品を創ることを通して答えを探してきた。東日本大震災や福島第一原発事故は、わたしにとってもターニングポイントだった。あれほどの惨劇を短い時間で受けとめるのはとても難しい。教員や学生たちも起きたことの大きさに打ちのめされていた。自分の子どもも、毎日流れてくる悲惨な映像に、気持ちまで流されかけていた。「こんな世界で生きているほうがいいのか？」と問われた時はさすがにショックだった。

このままではいけないと思い、即座にウルトラファクトリーのブログに今芸術が果たすべき役割について「立ち上がる人々」というタイトルでメッセージを書き込み、学内ホールに全長 7.2m の《ジャイアント・トラヤン》を立ち上げた。よく絶望に打ちひしがれた後に回復するとき、「立ち上がる」という言葉を使うがそれは心と体が不即不離である証拠なのだろうと思う。だから、巨大なモニュメントをみんなで立ち上げることから、心と体を回復しようと考えたのだ。そのメッセージは少なからず伝わったと思う。

その後、震災前から交流のあった福島に入り、放射能の影響で外出できない子供たちのためにワークショップを開いたり、放射能汚染を防ぐための研究を何度も行ってきた。同時に、放射能汚染で苦しむ人々が立ち上がる未来の姿をイメージし、《サン・チャイルド》という全長 6.2m の巨大モニュメントを作った。この「大きな子ども」は、上を向いて立ち上がっている。そして《サン・チャイルド》はすぐさま国内外で巡回展示されることになった。わたしにとっても、震災の起きた年に創り、展示することが重要だった。立ち上がるのには時間がかかる。だけど、時間がかかれば、余計に立ち上がれなくなる。それは心も体もよく似ている。

そして、震災の翌年には、事務局の資金不足に協力するため、約 200 名の方から運搬・設営費の寄付を募り、福島ビエンナーレで《サン・チャイルド》を展示した。放射能防護服を

着て、ヘルメットを取っている姿は、福島の人々にはまだ受け入れられないと思っていたが、福島在住の方からも寄付が集まり、暖かく迎え入れられたことに安堵した。

その2年後のビエンナーレには、未来を夢見て瞑想した少女が立ち上がる《サン・シスター》を展示し、米どころでもある福島の方のためにパッケージ・デザインなどの協力も行ってきた。今、自然エネルギーを使った新しい地域の発電所の発足にあわせて、モニュメントを計画している。

芸術が平和をもたらすことができるかどうかは難しいテーマであるが、わたしの経験に照らして考えると、創造することで未来を指し示したり、生きる力には成りえるのではないかと思っている。人間は未来の想像力をなくしてしまえば、生きる力も失ってしまう。絶望の光景ばかり見ると生きる力が萎えるのはそのためだ。また、心だけで立ち直るのも難しい。あくまで心と体を使って、創造することで芸術の力は発揮される。

指をくわえていても未来は訪れないし、平和も訪れない。芸術家はどのような状況下においても、作品を通して未来を創る意志を心と体で示し続けることが重要なのではないか。ひとつひとつの効果は小さいかもしれないが、積み重なることで大きなうねりになることもある。芸術家や人々の心と体を使った行動の先に平和への道のりも見えてくるだろう。この会議は、私自身の覚悟を改めて深める機会となった。

平和文明会議 会議メンバー プロフィール

(順不同・敬称略、2015年3月31日現在)

松本健一

作家、評論家。麗澤大学教授。文明哲学研究所客員教授。評論、評伝、小説など多方面で執筆する。『近代アジア精神史の試み』でアジア・太平洋賞、『日本の近代―開国・維新』で吉田茂賞、『評伝 北一輝』（全5巻）で司馬遼太郎賞と毎日出版文化賞を受賞。他に『白旗伝説』、『北一輝論』、『評伝 佐久間象山』、『司馬遼太郎が発見した日本―「街道をゆく」を読み解く―』、『三島由紀夫と司馬遼太郎』、『海岸線の歴史』、『泥の文明』など。（2014年11月27日、ご逝去されました。）

中村桂子

理学博士。JT生命誌研究館館長。文明哲学研究所客員教授。国立予防衛生研究所研究員、三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授を経て、93年、自らの発想で創設した生命誌研究館副館長に就任。2002年より現職。著書に『「生きている」を考える』、『「子ども力」を信じて、伸ばす』、『自己創出する生命』など。

大石芳野

ドキュメンタリー写真家。世界平和アピール七人委員会委員。文明哲学研究所客員教授。戦争や内乱、急速な社会の変容によって傷つけられ苦悩しながらも逞しく生きる人びとの姿をカメラとペンで追う。著書に『ベトナム 凜と』（土門拳賞受賞）、『無告の民 カンボジアの証言』（日本写真協会年度賞受賞）、『カンボジア苦界転生』（芸術選奨文部大臣新人賞）、『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』など。

スティーブン・リーパー

アメリカ、イリノイ州生まれ。ピース・プラットフォーム代表。広島女学院大学客員教授。長崎大学核兵器廃絶センター(RECNA)客員教授。近江兄弟社学園 International Communication Class 科長。文明哲学研究所客員教授。2007年米国人として初めて広島平和文化センター理事長に就任。全米における原爆展の開催や核兵器廃絶をめざす2020ビジョン・キャンペーンなど広島から世界に向けて核兵器廃絶を訴えてきた。2013年同職を辞任。今後は日米を結んで平和文化の浸透に努める。翻訳家。著書に『日本が世界を救う―核をなくすベストシナリオ』など。

豊崎博光

フォトジャーナリスト。文明哲学研究所客員教授。1978年にアメリカが核実験を行った太平洋中西部、マーシャル諸島のビキニ島住民や水爆実験の死の灰をあびせられたロンゲラップ島住民などの取材を始めたことをきっかけに、以降、世界の核実験場などの施設と放射能に汚染された風下地域に住む被曝者、環境と地域社会への影響などを取材。著作『アトミック・エイジ―地球被曝 はじまりの半世紀』（第1回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）など。

小松正明

原水爆禁止大阪府協議会事務局長。文明哲学研究所客員教授。日本平和学会、日本生活教育連盟所属。核兵器廃絶、原発ゼロに向けた取り組みに精力的に従事。「一人ひとりを真に大切にす学年集団づくり」、「広島・長崎・沖縄—君の人生に生きている」など全国教育研究集会にて発表。

鎌仲ひとみ

映画監督。文明哲学研究所客員教授。フリーの映像作家として、テレビ番組、映画を監督。2003年ドキュメンタリー映画『ヒバクシャ—世界の終わりに』以降、2006年『六ヶ所村ラプソディー』、2010年『ミツバチの羽音と地球の回転』3部作で放射能汚染、被ばく、原発やエネルギーの問題を追う。ほかに、2012年『内部被ばくを生き抜く』などのドキュメンタリー作品がある。著書に『原発の、その先へ ミツバチ革命が始まる』など。

奥本京子

専門は、平和学、平和ワークにおける芸術アプローチ、紛争転換・非暴力介入論、ファシリテーション研究、NGO活動研究。大阪女学院大学教授。文明哲学研究所客員教授。日本平和学会（理事、平和と芸術分科会副責任者）、日本英文学会、日本シェイクスピア協会、国際トランセンド（認証トレーナー）、東北アジア地域平和構築インスティテュート（運営委員会委員長）など多数の活動に精力的に参加。著作に『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』など。

大澤真幸

社会学者。文明哲学研究所客員教授。社会学博士。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授を歴任。著書に『ナショナリズムの由来』、『不可能性の時代』、『「正義」を考える』、『〈世界史〉の哲学 東洋篇』、『夢よりも深い覚醒へ—3・11後の哲学』など。

尾池和夫

京都大学理学博士。京都造形芸術大学学長。京都大学理学研究科長、副学長を歴任、その後第24代京都大学総長、国際高等研究所所長を務める。2008年から日本ジオパーク委員会委員長。著書に『俳景（四）—洛中洛外・地球科学と俳句の風景』、『四季の地球科学 日本列島の時空を歩く』、『日本のジオパーク』、『変動帯の文化』、『日本列島の巨大地震』など。

宮島達男

現代美術家。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学副学長。国内外の主要美術館での展覧会多数。世界の美術館に作品が収蔵されているほか、パブリックアート作品も多い。世界アーティストサミットを開催。1996年から、長崎で被爆した柿の木二世の苗木を世界の子どもたちに育ててもらおうアート・プログラム「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を推進。

秋山豊寛

京都造形芸術大学芸術学部教授、ジャーナリスト、宇宙飛行士。テレビ局の記者だった1990年12月2日、日本人初の宇宙飛行士としてソユーズ宇宙船に乗船し、9日間宇宙飛行。その後、福島県で農業を営み、無農薬栽培やしいたけ栽培を实践するが、「3・11」東日本大震災と原発崩壊のため“難民”に。著書に『原発難民日記』、『農人日記』、『宇宙と大地』など。

田口洋美

環境学、民俗学、文化人類学専門。東北芸術工科大学東北文化研究センター所長、同芸術学部教授。1996年に狩猟文化研究所を設立、同代表。1990年マタギサミットを發起、主宰幹事を務める。山と人と動物を知る異色のフィールドワーカー。近年はロシア極東、シベリア地域の先住民族研究や野生動物の保護管理問題などに着手。

ヤノベケンジ

現代美術作家。京都造形芸術大学美術工芸学科教授。ウルトラファクトリー・ディレクター。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群は国内外で評価が高い。1997年より、放射線感知服《アトムスーツ》を身にまといチェルノブイリや「太陽の塔」を訪れる《アトムスーツプロジェクト》を行う。「第五福竜丸」をモチーフとした作品や、2011年震災後、希望のモニュメント《サン・チャイルド》を国内外で巡回するなど、精力的に発表を続けている。

井原甲二

京都造形芸術大学・東北芸術工科大学共同研究機関「文明哲学研究所」所長、京都造形芸術大学芸術学部教授。精神文化事業に携わるビジネス展開を目指し、関連会社を数社起業したのち、1993年5月に月刊『MOKU』を創刊。対談ラジオ番組・ラジオ日本「井原甲二の心の時代」、YBC山形放送「井原甲二のヒューマンネットワーク」などのパーソナリティを歴任。月刊『MOKU』主筆を務める。

平和文明会議 総括集

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類に平和がもたらされるか

発行日 2015年7月1日

発行者 京都造形芸術大学・東北芸術工科大学
共同研究機関 「文明哲学研究所」

京都造形芸術大学 文明哲学研究所
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116
TEL : 075 791 8302 FAX: 075 791 8387

東北芸術工科大学 文明哲学研究所
〒990-9530 山形市上桜田 3-4-5
TEL : 023 627 2177 FAX: 023 627 2360

印刷・製本 修美社